

# DISCOVERY

シコク発見



渡邊 朋美

WATANABE Tomomi

キネトスコープ社

<所在地>

徳島県名西郡神山町神領字  
本上角90番地

<Website>

<http://shizq.jp>

**杉を再び価値化することで、神山の山々を自然の植生に戻していくムーブメントを広げていきたいですね。**

## 一大手証券会社を辞めて神山へー

私が某大手証券会社に入社したのはリーマンショックの年でした。大学進学で上京後、そのまま働き始めるというよくある流れです。営業担当として、商品販売や顧客獲得のノルマに追われる日々のなか、「20年後も同じことをやっているんだろうな…」と漠然とした不安を抱きつつ3年が過ぎました。転機となったのは沖縄の非営業部門への異動が叶ったことですね。会社には申し訳ないですが、営業に使っていたスーツや名刺は全部捨てて赴任しました。

ハイ、はっきり言って辞める気満々でした(笑)。

実は、「神山」という土地は沖縄赴任の前に知っていたんです。

ある日のフェイスブックで、横浜にいるはずの友人が、四国の山奥で集団生活している写真を見つけたんです。それは当時、大南信也氏率いるNPO法人グリーンバレーが神山で始めた「神山塾」。このときは「色々な人がいるんだな」程度の意識でしたが、その後、バックパッカーとして国内外を転々としているとき、偶然にもこれから神山塾に入塾するという人に出会ったんです。

神山、どんなとこなんだろう。

大手証券会社で働いていた反動で、次はスケールの小さな仕事に関わりたい、地方で面白いことをやっている人に学びたいと思っていました。幸運にも当社代表の廣瀬との接点ができ、今の仕事(「神山しづくプロジェクト」※後述)を頂いたんです。

## ▶ 一で、神山町に行ってみたー

徳島県名西郡神山町。徳島市内から車で30分ほど、林業が基幹産業だったこの町は森林率が86%、うち71%が杉やヒノキの人工林です(※1)。その多くは、かつて林業が活況だった頃に植林されたものですが、安い外国資材の輸入などでシェアも価格も下落すると「もはや林業では食べていけない」、「杉は売れない」という状態に。

次第に、伐採されず放置されるようになった人工林。私も言われるまで気づかなかったのですが、杉やヒノキは常緑樹なので年中葉が落ちず、紅葉もしないので山の景色はずっと一緒なんです。考えてみると、いびつですよね。



間伐されない人工林は、地表に一年中日光が届かないので下草が育たず、土が硬くなるため水源滋養力(※2)も弱まり土砂災害が起きやすくなります。神山町役場も自然の植生に戻すため「森林ビジョン」を策定し、広葉樹を植林していますが、成長まで60年はかかります。

※1 神山町HP「神山の森林ビジョン」から抜粋。

※2 森林の土壌が降水を貯留し、河川に流れ込む水の量を平準化して洪水を緩和するとともに、川の流量を安定させる機能。

## ▶ 一キネトスコープ社がデザイン「神山しずくプロジェクト」ー

そんな実態を目の当たりにするなか、当社代表の廣瀬が考えたのは、得意分野である企画力とデザイン力で再び杉を価値化すること。杉が売れるようになれば状況は変わるかもしれない、と。

このタンブラーを見てください。

熟練職人が、木工ろくろ(※3)という伝統技法でハンドメイドするのですが、杉は木目が荒いうえ柔らかい部分と硬い部分のサンドイッチ構造だからとても削りにくく、割れやすい。器には不向きな素材ですが、1年以上かけて自然乾燥させ、刃先を何度も研ぎ直しながら、手先の感覚と削り音を頼りにここまで滑らかに仕上げることができました。職人芸です。

※3 高速で回転する機械に木を固定し、刃物を当てて木を削るという伝統技法。





「徳島県人の財布のひもは固いけん一、(1万円超える食器なんか)無理無理ー!」。

5年前に頂いたお客様の声です。確かに食器としては高価だと思いますけど、これは杉を使った新しい価値創造への挑戦なので、(高い高いと言われながらも...)初志貫徹で走り続けました。最近、徐々にではありますが徳島の「良いモノ」として認知され、大切な人へのプレゼントなどで使われるお客様が増えてきました。贈られたひと、そして贈ったひと、両方からのリピーターが増えているんです。今年は、明治神宮の奉獻品に選ばれ、たくさんの応援してくださる方にも喜んでいただけました。



### ▶ 一前に歩み続けるために一

「神山しづくプロジェクト」を進めていくため、持続可能かどうかはとても大事なことです。これには大きく分けて2つの視点があると思っています。

まずミクロの視点では、杉の調達・加工・最終仕上げまでの工程を、極力自社内で行えるようにすること。例えば、材料となる杉の伐採は町内の製材所と一緒にやっています。私も、チェーンソーを持って山に入るんですよ(笑)。

そして肝となる木材加工。最初は徳島市内の木工ろくろ職人をお願いしていましたが、今は私たちのプロジェクトに共感した若者が後継者として神山に来て、修行を経て職人として活躍しています。木工ろくろをはじめとした伝統技術を活かす機会としても価値があると考えています。

次にマクロの視点です。地域資源である町産材を使って付加価値のある製品を作り、地域外に売ることによって外貨を獲得する。そして、新たな雇用を創出する。この循環をより大きなものに成長させていく必要があります。

私たち自身、杉の活用を広げていく必要がありますが、神山町も町産材のブランド化に向けて産地の認証制度を設けました。こうした取り組みにより、品質の確保と用途の裾野拡大が進んでいくことを期待しています。既に、神山杉を活用した集合住宅の建設や、徳島市内の建設業者が建材として採用するなどの動きが出てきていますよ。



## ▶ 一地方(神山)で得た気づき—

最初に感じたことは、日常の営みのあらゆる点が長期目線だということです。

薪ストーブの薪も2年かけて準備しますし、林業は100年先、孫の代を見据えています。今日、明日に結果を出せと言われてきた世界から距離を置くことで、働くこと本来の意義や尊さに気づきました。自然や季節感をあまり感じられない都会と違い、こっちは自然と共生し、地域の課題を自分事として考えながら仕事をする。

私たちのミッションは、杉を再び価値化することで杉の利用を促進すること。その先には、人工林を自然な植生に戻したいという思いがあります。ここで働き、生活することで、自然に「そうじゃないと続かないよな」と感じるようになっていました。もちろん、お金を稼ぐことは必要です。でも、それだけが目指すゴールではないんです。

「神山しずくプロジェクト」は、そんな私たちの思いを広げていきたい、一緒に取り組む仲間を増やしていきたいというムーブメントです。まさに、一滴のしずくからゆっくりと波紋が広がるように…。

理想ですか？

神山の山々を紅葉に彩られた美しい景色に変えることです。これがいつ実現するかは分かりませんが、ポリシーは繋いでいきたいですね。

(※掲載内容は2020年11月現在のものです)



### 編集後記

グッドデザイン賞を受賞したタンブラー、実際目の前でみると洗練されたデザインでまさに職人芸だと感じました。都会の大手証券会社の営業という環境から神山しずくプロジェクトに辿り着いた渡邊さんの心情の変化のお話を大変興味深く聞かせていただきました。

(徳島財務事務所 管財課・坂本 春香)

ショップでの取材のときに、しずくのタンブラーでお茶を飲みました。普段使っているコップで飲むよりも数倍美味しく感じ、杉に秘められた価値を体感しました。杉の利用が進み、美しい紅葉に彩られた神山の山々を見る日が楽しみです。

(徳島財務事務所 理財課・徳永 健一)